

狸 9 呼ばる狸 = = = 猪・鹿・狸より

正月薪（もや）刈りなどに行き、山の上で一人働いていると、何処ともなくほーいと呼ぶ声がある。雨にでもなりそうな、とろんとした温かい日などに多かった。また女が一人でいたりすると、きまって呼ぶと言う。ほーいと、そう思うせいか、何だか出ない声を無理に絞り出すようにも聞こえると言う。

こちらが鉈でたんたと木を伐ると、向うも同じような音をさせる、ざーっと木を倒すと、やはりさせた。明るい、日がかんかんと照っている時だと言う。誰だと呼んでみても返事がなくて、暫くするとまたほーいと呼ぶ。気味が悪くなって帰って来たなどと言うた。そうかと思うと、一人で炭など焼いていると、間近の山の陰などから、笛の音や太鼓で、如何にも賑やかに囃し立てて近づいて来る。今一息で、あの曲り角を出るかなどと思うと、ふいと消えてしまったりする。みんな狸の悪戯だと言うている。

狸は人を呼びかけて、それをきっかけに、だんだん呼び交わして、相手が負けたら喰おうと言う。それで夜中にうっかり返事は出来ない、返事をしたが最後、何処までもやらねばならぬと言う。夜中に一人でいる時に、つい騙されて返事をしたばかりに、自在の茶釜を飲み干しても足らなんだなどと言うた。長篠村吉村の寺屋敷の裏の家では、家内三人で代わる代わる返事をして、やっと負けずにすんだ。あるいは返事の代わりに木魚を叩いて夜を明かしたが、朝見たら軒下に恐ろしい古狸が、腹を上にして死んでいた話もあった。



囲炉裏と自在かぎ

滝川の奥の大荷場の一つ家では、近くのむくろじ谷にいる狸が、毎晩悪戯をして仕方がない。そしてシンゾの藤兵衛ポットポトと言うてからかった。藤兵衛も負けてはいず、そう吐（こ）くお前もポットポトと言うて、一晩中呼ばり通して、朝見たら軒下に大狸が死んでいたと言う。この大荷場は一つ家で、しかも藤兵衛が一人者の処から、狸と呼ばり合って暮らしておるげななどと、悪口にも語ったのである。

鳳来寺の奥の院などで、夏分雨乞いのあった後には、夜になってきまって、同じような笛太鼓の音がしたと言うが、こちらは狸とは言わなんだ。天狗のしわざだと言うておる。雨の降る晩などに、ぼとぼと聞こえたのが、狸の腹鼓であった。そんな晩に、坂を登って行くと、御坂の脇で彼方でも此方でも、ぼとぼとやっていたと言うことである。